

## 原著論文

# 社会参加活動をベースとする 青少年育成プログラムの開発と実践

坂 本 徹

北里大学獣医学部

## 要旨

17年間の学校教育と20年間の社会教育及び社会教育行政の経験をもとに教育の本質に迫る。教育の目的は何かという原点に立ち戻ったとき、教育の本来の在り方が必然的に見えてくる。学校教育に依存しすぎることなく、地域の様々な教育資源を活用するとともに、家庭や地域社会との連携による教育の場が必要である。実際に手掛けた高等学校や特別支援学校での実践や県教育委員会における事業開発を組み合わせ、たどり着いた「社会参加活動をベースとする青少年育成プログラム」の開発と実践の様子を明らかにする。

キーワード：学校教育、社会教育、社会参加活動、青少年教育、実践活動、地域の教育資源、異年齢交流、学生団体、レスタ

## はじめに

昭和55年（1980年）に高校教諭としてスタートして以来、学校教育と社会教育の現場を行ったり来たりしながら、様々な学習者と出会い、様々な教育活動に取り組んできた。しかしながら、真の教育をすることができたかという自問に対して胸を張って「イエス」とは言いがたいことも事実である。

例えば、高校教師としての教育は本物であっただろうか。教科指導においては教科書をなぞるだけの指導や受験のテクニックに終始していたのではないか。生徒指導の場面では、校則の遵守や非行防止に終始し、人格形成という大目的を忘れていなかっただろうか。進路指導においても、単なる進路選択指導に終始し、本当のキャリア教育はできていなかったのではないだろうか。

社会教育においても同様である。人づくりを標榜していながら、形だけの事業の遂行に追われていたのではないだろうか。地域の未来を担う人材の育成に貢献できていたのだろうか。

定年を迎え、37年を振り返ったとき、自責の念に駆られる思いであった。そんな中で

始めた社会参加活動をベースとする青少年育成プログラムの開発と実践。前向きでエネルギーギッシュな若者たちと一緒に過ごす中で、教育の本来あるべき姿がようやく見えてきた気がする。

## 1 学生団体レスタの誕生

平成24年（2012年）5月、私の前に目をキラキラと輝かせる8人の大学生がいた。場所は青森県立盲学校の校長室。「やりたいです！」・・・初代の代表となる青森公立大学2年のAFさんの声に一同が深く頷いた。異年齢交流の場の再生に挑む学生団体レスタの誕生である。私の趣旨に賛同してくれた若いパワーが集結し、未来へ向けて踏み出した瞬間であった。小学生・中学生の成長をサポートしながら自分たち自身も成長するというWINWINの活動がスタートした。

### 【レスタ会則】

#### 第3条（目的）

本会は、年齢や所属を超えた協働の活動を通して、互いに高め合い成長することを目的とする。加えて、本会設立の趣旨に鑑み、不登校や障害のある子供たちの理解と支援に資することとする。

### （1）レスタ誕生の社会的背景

昨今、いじめや不登校に関する報道が多く見られる。実際、大きな社会問題となっていることも事実である。文部科学省の「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸問題に関する調査」からも、近年、その状況はますます深刻になっていることがわかる。原因は様々であろうが、子供たちを取り巻く環境の変化が作用していることは間違いない。特にここ50年程の変化は急激かつ著しく、子供たちの生活に多大な影響を与えていると思われる。

第一に挙げられるのが科学技術の目覚ましい進歩である。テレビ、自家用車、インターネット、スマホなどが登場し生活の一部となった。これらのおかげで、私たちの生活は確かに豊かになったが、便利さと引き換えに失ったものも多い。テレビが家庭団欒の主役となり親子の会話が減った。自家用車の普及が近所付き合いの希薄さに拍車をかけた。その他にも数えきれないほどある。

第二に挙げられるのが人口構造の変化である。核家族化、少子高齢化、人口減少等の急速な進行が様々な社会問題を引き起こしている。かつては、何気ない生活の中にたくさんの学びが存在した。3世代、4世代が同居し、兄弟姉妹も多く、近所づきあいも日常的であった。兄弟喧嘩、祖父母との語らい、近所の小父さんや小母さんに褒められたり叱られたり・・・そういうごく普通の日常の中で、子供たちは多くのことを体感的に習得していたに違いない。

ところが現代においては、そういう準備運動がないままに、いきなり学校という集団の中に放り込まれるのである。対人関係の歪みがいじめという行動を引き起こし、学ぶことの意味が分からない子が学業不振に陥る。不登校の一因がそこにあるようにも思われる。

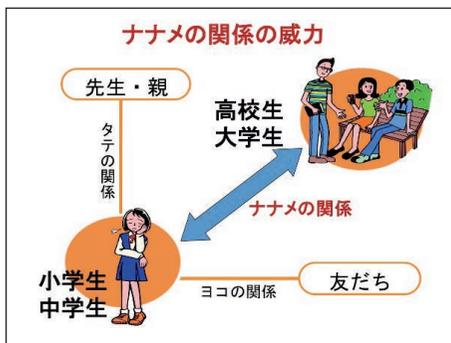
## (2) 昭和の空地の教育力

社会変化が子供たちに与える影響の中で、特に象徴的なものが「遊び」である。私が小学生のころ、学校から帰ると家の玄関にランドセルを放り込み、近くの空地に飛んでいくのが常であった。そこには同級の友達だけではなく、そのお兄さんやお姉さん、さらには弟や妹たちもいて、20人程の子供たちが幾つかの小グループに分かれて遊んでいた。グループの再編が繰り返される中で、年上の真似をしたり年下の面倒をみたりしながら、親からとは異なる知識をもらい、学校ではできない体験をした。玩具や遊具も乏しかったから色々と工夫して遊んだ。困ったこと起こると、小さな頭脳を結集して何とかする。そういうことが日常的に行われていたのだ。

子供たちだけの異年齢集団…それは極めて重要な学習の場でありトレーニングの場であった。遊びの中でコミュニケーションの力を磨き、喧嘩や仲直りを通して人間関係を構築する術を身につける。工夫して遊ぶことで創造力を磨き、自分たちでトラブル処理をしながら問題解決能力を高める。そこには、教えられるのではなく、「吸収するような」学習があったのだ。どれだけ多くの、そして、どれだけ大切なことを吸収したことか。しかし、社会の急激な変化が子供たちを取り巻く環境を変えた。遊びのスタイルも大きく変わり、あの「空地」は消えてしまった。

## (3) ナナメの関係の威力

人間関係には、タテ、ヨコ、ナナメの3種類がある。例えば、小学生・中学生から見ると、親や先生はタテの関係。知識や経験が豊富で的確な助言をくれることはわかっているがちょっと遠い存在。思春期になると素直には受け取りにくい。友達はヨコの関係。気軽に話せて共感できるが、同程度の経験値しかなくて頼りない。そして、高校生や大学生はナナメの関係。年上だから頼もしく、年齢が近いから親近感を感じる。近未来の自分の姿と重なるリアリティもある。

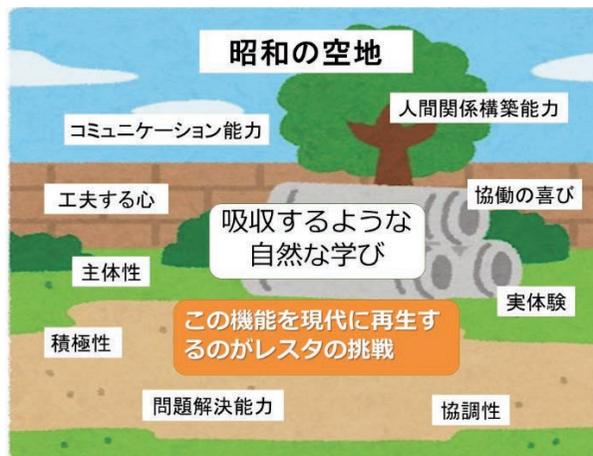


異年齢交流が青少年の成長に大きな効果を発揮するのは、このナナメの関係が有効に機能しているからに他ならない。青森県総合社会教育センターではこのことに着目し、異年齢交流をベースにした青少年育成事業に力を入れている。17年目を迎えたキャリア形成サポート事業である。この

事業は、当時、青森県教育委員会の指導主事であった私が開発したもので、意図的に異年齢集団を形成し、その中における活動を通して高校生と大学生の育成を図ろうというものである。長きにわたる事業の継続が、ナナメの関係の威力と有効性を物語っている。

#### (4) レスタの挑戦

レスタもまた、ナナメの関係を取り入れた活動である。異年齢交流の場を意図的・計画的に作ることによって、小学生・中学生には様々な体験による自然な学びの場を提供する。そして、その運営を高校生・大学生に委ねることで彼らの成長を図ろうというもので、言わば、昭和の空地の教育的機能を現代に再生するという挑戦であり、社会参加活動をベースとする青少年育成プログラムの開発という挑戦である。



## 2 異年齢交流団体としての側面

レスタは高校生と大学生の有志で構成されている。正式名称はLesta（由来はLet's start together）で、さあ一緒に始めようの精神で異年齢交流による様々な活動を行っている。

現在のメンバーは24人。主力のメンバーは、青森公立大学、青森県立保健大学、青森明の星短期大学、弘前大学、弘前学院大学、京都橘大学、あおもりコンピュータ・カレッジ、青森北高等学校、青森明の星高等学校、東奥義塾高等学校に在籍している。その他に準会員として、文教大学、山形大学、米沢女子短期大学にもメンバーがいる。

#### (1) レスタの取組

レスタの取組の中心は小学生・中学生を対象とする異年齢交流事業で、毎月定期的に行う寺子屋と、年に5～6回不定期に実施する交流イベントがある。

##### ア 寺子屋

小学生・中学生を対象とする「寺子屋れたす」が開かれるのは毎月第4日曜日。

10：00から15：15まで、青森市内の民家をお借りした会場で、ホスト役の高校生や大学

生と一緒に宿題をやったり、モノづくりや軽スポーツを楽しんだりして賑やかな時間を過ごす。事前の申込みが必要で、レスタのホームページで受け付けている。小学生の場合は保護者が送迎するケースが多い。午前中の学習タイムは前半と後半に分かれていて、前半はそれぞれが持参した宿題や課題に取り組む。自学自習の習慣を身に付けようという趣旨でおしゃべりは禁止。高校生や大学生も自分の課題に取り組む。



ピンと張りつめた空気の45分間である。普段は落ち着きに欠けるADHD気味の小学生も頑張っている。5分間の休憩を挟んでの後半は、一緒に勉強したり分からないところを教えてもらったりと、学習をツールとした異年齢交流が行われる。

午後の2時間程は交流タイムである。毎回、趣向を凝らしたアトラクションが用意され、小学生から大学生までが楽しく触れ合っている。これまでに行われた主なものは、こぎん刺しや勾玉作りなどの郷土に因むものや、百人一首、プラネタリウム作りなどの季節を感じさせるもの、手話教室、SDGsカルタ等の社会性のあるものなど多彩だ。これらはその回を担当するチーフが考える。

昼食はレスタメンバーが交代で調理し提供する。メニューはカレーライス、焼きそば、素麺、チヂミ、焼きおにぎり等。盛り付けや配膳は子供たちも手伝う。一緒に食事も重要な交流活動の一環である。参加料として1回500円をいただいて、食材やアトラクションの材料代に充てている。

## イ 交流イベント

2カ月に1回ほどのペースで開催する交流イベント（レスタでは企画と呼んでいる）は、丸1日または2日間をかけて実施する大掛かりな催しである。コロナ禍のため、最近は募集人数を少なめに設定しているが、それでも15人ほどの子供たちが集まってくる。内容は、クッキング、絵本づくり、野外活動、モノづくり等と多彩だ。

### 【例】絵本づくり企画

○日 時 令和5年10月21日、22日 10:00~15:00

○場 所 青森県総合社会教育センター

○チーフ RO (高2)

○コアスタッフ HM (高2)、SK (高2)

○当日スタッフ NK (高2)、MN (高2)、AN (大2)、MT (大2)、  
NJ (大2)、YS (大4)

- 参加者 小学生（低学年8人、中学年5人、高学年4人）  
中学生（各校の文化祭と重なったため参加者無し）

- テーマ

物語の続きを想像して一冊の絵本を完成させよう。

- 目的

- ① 異年齢交流を通して、お互いの考え方や行動を尊重し、共に成長する。
- ② 創作活動を通して、創造力を養う。
- ③ 読む人の気持ちを考えながら創作することで、他人を尊重する心を養う。

- 概要

- ① 10種類の未完成の絵本を用意し、その中から好きなものを選ぶ。
  - ② 各絵本の前半の4～5ページは予めレスタメンバーが書いておく。
  - ③ 参加者は2～3人のチームを組んで、後半のストーリーを考える。
  - ④ 手分けをして絵と文章を書き、完成させる。
  - ⑤ 読み聞かせ会を開催してお互いに発表し合う。
- ※ 全体を通してレスタメンバーがサポートする。



## ウ 資金と活動拠点

レスタは会費制である。大学生は月500円、高校生は月300円の会費を集めて運営資金としている。また、青森県総合社会教育センターの生涯学習フェアに飲食店を出店して得られる売上金も少額ではあるが貴重な収入源である。さらに、子どもゆめ基金の助成金や青森市民活動活性化事業の補助金等を活用させていただいている。その他に、応援して下さる方からの寄付や差し入れをいただくこともある。

以前は青森県総合社会教育センターを拠点に活動としていたが、コロナ禍によって使用が制限され、活動が停滞する事態に陥った。行き場を失って困っていたところ、「どうぞ使ってください」との申し出があり一軒家を丸ごと貸していただけることになった。ご両親が住んでいた家（実家）で現在は使用していないとのこと。そこを無償で提供して下さるというのである。光熱費の一部は負担しているが、月に1000円程度である。レスタをもじって「れたすハウス」と名付けたこの活動拠点は、毎月の寺子屋の会場となるほか、リハーサルや研修に活用させていただいている。



## (2) レスタの流儀

### ア 全力で取り組む

レスタメンバーが企画に取り組む姿勢は半端ではない。実施要項を作成する段階から様々な案を出し合って練りに練る。前述の絵本づくり企画においても何度となく打合せが繰り返された。そして、2週間前には半日をかけてリハーサルが行われ、本番と同様の進行で念入りのチェック。さらにその後も、チーフから細かい修正がLINEで届く。とにかく全力投球なのである。

### イ やってあげない

子供たちの作業に、レスタのメンバーは安易に手伝うことをしない。上手にできなくても一生懸命に取り組むことが子供たちの成長には大切だと理解しているからである。また、小さなトラブルがあっても、できるだけ入り込まず子供たちだけで解決させることにしている。

### ウ 自分たちも楽しむ

自分たちが楽しくなければ、子供たちに楽しさを伝えることはできない。準備段階の苦労を忘れて当日は大いに楽しむ。それがレスタ流である。

### エ 目的と手段

「レスタって何をする団体？」と聞かれると返事をするのが難しい。「えーと、クッキングをしたり、絵本を作ったり、雪遊びをしたり…」という具合である。レスタにとって、クッキングも絵本も雪遊びも異年齢交流の手段の一つだからである。

### オ 独特の評価基準

レスタにおける事業評価は独特である。例えば、絵本づくり企画において、綺麗な絵が描けなくても、文字が多少暴れていても構わない。レベルの高い絵本でなくてもいいのである。大事なものは、上手くできたかではなく、一緒に活動する中でそれぞれが成長できたかなのである。

## (3) 社会的評価

レスタが長年にわたって活動を続けることができるのは、メンバーの熱い情熱に加えて、レスタの活動を理解し支援をしてくださる多くの方々のおかげでもある。また、レスタの活動に子供たちを参加させてくださる保護者の皆さんの理解も忘れてはならない。さらに、新聞やテレビなどで取り上げていただくこともメンバーのモチベーションアップに繋がっている。

去年は、内閣府主催の令和4年度「未来をつくる若者・オブ・ザ・イヤー」内閣総理大臣表彰をいただいた。こ



のように、社会的に評価していただくことはメンバーの大きな励みとなっている。

### 3 青少年育成プログラムとしての側面

これからの激動の時代、未来を切り拓き逞しく生きるために、青少年の皆さんにぜひとも身につけて欲しいチカラがある。企画力、実践力、発信力、多様性理解力、人間関係構築力、協働力、活力創造力の7つである。これらは座学や簡易的な体験学習だけでは得ることが難しい。そのため、基本設計のしっかりした青少年育成プログラムの構築が必要である。

#### (1) 基本設計は「環境を整え、主体性を引き出す」

本育成プログラムの基本設計の根幹は2つ。一つは環境を整えること。もう一つは主体性を引き出すことである。教え込むのではなく、吸収するような学びによる育成のためには良好な環境が不可欠である。また、その環境が正しく機能し、子供たちが成長していくためには主体性という要素が極めて重要となってくる。

#### (2) 学生団体という形の青少年育成プログラム

青少年の育成を目的として掲げる団体は数多くあり、レスタと同様に異年齢交流を実施している団体も少なからず存在する。しかしながら、いわゆる「似て非なるもの」と私は考えている。多くの場合、国際交流や環境問題、自然体験といった活動の遂行が優先され、小学生・中学生の育成は「結果として」というポジションに追いやられているからである。さらに、高校生や大学生は大人の下でのボランティアスタッフとして働かされ、育成の主たる対象になっていないことが多い。本育成プログラムでは、小学生から大学生までの全てを育成の第一目標に掲げている。これらが一般的な団体とは根本的に異なるわけで、レスタは学生団体という形の青少年育成プログラムに他ならない。

一般的な団体	活動の遂行	>	メンバーの育成	高大生はスタッフ
レスタの場合	メンバーの育成	>	活動の遂行	高大生も育成の主たる対象

#### (3) 二重構造のプログラム

レスタにおいては、育成の対象が幅広いことから、小学生・中学生と高校生・大学生とは異なる育成方法を用いている。小学生・中学生は異年齢交流の場での色々な体験を通してのびのびと成長し、高校生・大学生は異年齢交流の場を作る活動を通してチカラを付けるという二重構造になっている。

## 4 小学生・中学生の育成

前述のように、現代の小学生・中学生に欠けているものの一つに異年齢交流がある。小学校では「縦割り班」という工夫も見られるが効果のほどは定かではない。レスタが提供する空間は、いわゆる「昭和の空地」の機能を現代にマッチした形で再現しようというものである。

### (1) 環境を整える

寺子屋も交流イベントもベースにあるのは異年齢交流であるが、もう一つ重要なポイントがある。それは大人が入り込まないこと。大人は口や手を出しがちであり、そのことが子供たちののびのびとした活動を阻害する。レスタの催しは保護者は同席しないのが原則であり、参観を希望する場合でも離れた所から見守っていただくようにしている。

### (2) 主体性を引き出す

レスタの流儀の一つに「やってあげない」があるが、これは子供たちの主体性を大切に重要なポイントである。この他にも、主体性を引き出す工夫が随所に施されている。例えば寺子屋における学習タイムである。前半はおしゃべり禁止であるが、小学生・中学生に他を頼らずに学習に取り組ませるためだ。後半の教え合いOKは、前半の緊張感を高める効果を狙っている。レスタの高校生や大学生は、私に習って、後述の「7つの育成ツール」を活用し、小学生・中学生の主体性を引き出すよう努めている。

## 5 高校生・大学生の育成

高校生・大学生の育成は、小学生・中学生に異年齢交流の場を提供するというミッション中で行われる。そのための環境を整え、レスタメンバーの主体性を引き出し、成長へと導くのは顧問である私の仕事である。

### (1) 環境を整える

#### ア 学生団体という形

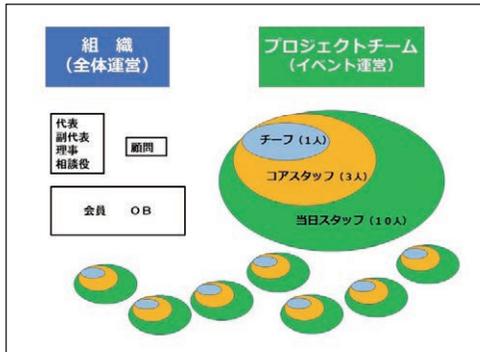
本育成プログラムが学生団体という形態をとっているのには理由がある。ボランティアスタッフという形では高校生・大学生の育成には不十分である。大学におけるゼミのような形も考えられるが、主体が私にある以上、彼らの大きな成長を引き出すには至らない。だからこそ、言わば「坂本徹塾」であるにもかかわらず、私は学生団体という形に拘ったのである。それは何にも優先して主体性を重視したからに他ならない。

レスタへの入会はそれぞれの自由意思による。代表は選挙で選任され、重要事項は総会で決定する。様々な催しの運営は全て学生たちが行う。私は顧問という立場でアドバイス

をするが、あくまでも主体は学生たちでなければならないのである。

### イ プロジェクト制

本育成プログラムの大きな特徴の一つにプロジェクト制がある。寺子屋や交流イベントはその都度編成されるプロジェクトチームによって運営される。他の団体では、イベントの企画や運営は役員中心に行われ、一般の会員は当日スタッフとして参加するのみという



ことが多い。そのやり方は役員のスキルアップにはなるが一般会員の成長に関しては不十分と言わざるを得ない。レスタでは組織の運営とイベントの運営を分離することによって、多くのメンバーが中心的な役割を担うことができるよう工夫がなされている。

代表、副代表、理事、相談役という役員は、レスタのリーダーとして組織全体の運営を担う。一方、様々なイベントについてはプロジェクトチームを編成して、毎回異なるメンバーで運営に当たる。

プロジェクトチームはチーフと3名程度のコアスタッフが中心となり、当日は更に数名が加わる。これらは全て立候補による。プロジェクトチームの業務は事前準備から事後処理に至るまで多岐にわたるが、このほとんどをチーフとコアスタッフが担う。レスタの会員数は20人程。これに対して年間の寺子屋や交流イベントの数はそれより多いので、大学生だけでなく高校生も年1回はチーフを務めることになる。また、ほとんどのメンバーは4～5回のコアスタッフを経験する。この仕組みは本育成プログラムの根幹となる環境設定である。

#### プロジェクトチームの業務

##### 【事前】

- ・企画書、実施要項の作成
- ・スタッフマニュアルの作成
- ・会場の予約（使用料の支払い）
- ・後援名義使用の申請
- ・参加者募集チラシの作成
- ・印刷屋への入稿と支払い
- ・送り状の作成、仕分け、発送
- ・SNSでの募集
- ・申し込み受付業務
- ・保険加入手続き
- ・材料等の購入
- ・リハーサル

##### 【当日】

- ・準備
- ・安全管理
- ・開会式・閉会式
- ・進行
- ・記録写真
- ・後片付け
- ・振り返り

##### 【事後】

- ・保護者への報告
- ・関係者への礼状
- ・会計処理

## ウ 体験ではなく実践

かつてに比べれば、学校の外に出かけ実社会の中で学ぶ機会が多くなっている。しかし、小学校から大学に至るまで、依然として学校内における座学や調べ学習が中心であり、数少ない学校外における学習も「体験」の域を出ないことがほとんどであろう。学びの成果を生かす場は実社会であるわけだから、直接実社会で学ぶ機会、つまり実践をもっと取り入れるべきである。このようなことから、本育成プログラムにおいては、高校生・大学生の育成の場として、小学生・中学生に異年齢交流の場を提供するという実践を中心に据えることとしたのである。

## エ 多様な研修

実践のために必要な知識や技能については、様々な研修の機会を持つことによって習得させている。その内容は、コミュニケーション、コーチング、ファシリテーション、プレゼンテーション、カウンセリング、障害理解、発達障害理解等、多岐にわたる。これらの多くはメンバー以外にも門戸を開いている。

## オ レスト・ワールドカフェ

毎年12月に開催されるレスト・ワールドカフェは、高校生・大学生や社会人を招いて開催され、多いときは150人も人が集まる。障がいのある方も積極的に受け入れていて、車椅子や白杖も珍しくない。12回目となった昨年のワールドカフェのメインテーマは「大切な人へ伝えたい思い」であった。テーブルテーマは「大切な人に伝えたいこと」「背中を押してくれたあの人に伝えたいこと」「10年後の自分に伝えたいこと」「これから生まれてくる子供たちへ伝えたいこと」「世界のリーダーたちに物申す」「サンタにお願いしたいこと」など。10テーマ、20テーブルで88人が語り合った。参加無料であるが、皆に分けられるお菓子を持参することが条件となっている。お菓子を食べながらの緩やかで楽しい語りの中で、それぞれが何かを感じ、何かに気づき、何かを得る。レストらしいスタイルの催しである。

### (2) 主体性を引き出す ～7つの育成ツール～

私が主体性の大切さを明確に意識したのは、今から50年程前、高校1年生の夏であった。ソニー学園が主催するあしのご学校というサマーキャンプでの小林茂氏（当時はソニーの常務）との出会いが私に大きな示唆を与え、今に至っている。彼が行った「厚木工場の奇跡」と言われる改革の根本は主体性を引き出すことにあった。また、後に手にしたステープン・R・コヴィーの「7つの習慣」においても、主体性が第1の習慣に置かれている。主体性は他の6つの習慣の基礎であるとともに活力の源であるからに他ならない。

主体性を引き出す方法は色々と考えられる。小林茂氏が開発したTKJ法もその一つであるが、本育成プログラムにおいては、次の7つのツールを用いたコミュニケーションによって主体性の引き出しを図っている。

## ア 聴く

第1のツールは「聴く」である。日常のコミュニケーションにおいても傾聴は大切な態度とされているが、本育成プログラムにおいては、単なる傾聴ではなく積極的な傾聴と捉えておきたい。傾聴は育成における出発点であると同時にベースとなるものであり、その後の全ての場面において極めて重要な役割を担う。

一つは高感度のアンテナとしての役割である。正確な情報無しでは、以下の「問う」「認める」「任せる」「褒める」「与える」「待つ」は機能しない。学生たちの声に積極的に耳を傾けることで、何を考えているのか、何を望んでいるのか、何で困っているのかなど…的確にキャッチするのである。

もう一つの役割は信頼関係の構築である。心の扉を開いて受け止めることで、安心感や自己肯定感を高めていくのである。

話をしっかり聴くことで相手の中に起こること

- ① 受け止められているという安心感が生まれる
- ② 自分の話には価値があるという自信になる
- ③ 自分には存在価値があるという自己肯定感につながる
- ④ 自分が何を感じているのか、思っているのかがはっきりする
- ⑤ 新しいアイデアがひらめく、バラバラだったイメージが統合される
- ⑥ 感情を表現することで気持ちが軽くなる(カタルシラス効果)

## イ 問う

第2のツールは「問う」である。ここでの問うは何かを聞き出すということではなく、意図を持って問いかけるという態度である。聴くとセットで主体性を引き出す…いわゆるコーチングである。レスタメンバーにアドバイスという名の栄養の無い答えを安易に与えてはならない。「君はどう思う？」と問いかけるのである。「次の企画のテーマは何が良いでしょうか？」→「君はどう思う？」、「研修の内容は何にしましょうか？」→「君は何が良いと思う？」、「〇〇企画のチーフは誰が良いでしょう？」→「君は誰が適任だと思う？」…と、こんな感じである。既製品の答えを与えるのではなく、それぞれの中にある様々な答えを引き出す。そうすることによって、彼らは自ら考え、自ら答えを見出し、自ら決断することになる。それに続く行動は、まさに主体的なものになっていく。

コーチングは奥の深いテクニックであるが基本は極めてシンプル。聴いて受け止め、質問して引き出す…強力なツールなのでぜひ身に付けておきたいものだ。

## ウ 認める

第3のツールは「認める」である。彼らの意見や発案を無下に否定してはならない。もっと良い策があったとしても押し付けたりせず、仮に失敗や挫折のリスクがあったとしても、思い通りに進ませることである。昨今、家庭においても学校においても、親や先生が先回りして上手くいくようにお膳立てをすることが目に余る。成功体験から学ぶことは少なく、むしろ失敗体験こそ成長の糧なのだから、目先の成功を欲しがらず、試行錯誤を繰

り返ししながら小さなステップで向上していく姿こそ、私が求める成長であり、育成の形である。

## エ 任せる

第4のツールは「任せる」である。寺子屋や交流イベントの際、私は小学生・中学生に直接話しかけたりすることはしない。柱か壁のように存在するようにしている。異年齢交流を提供するのは高校生・大学生であり、私はしゃしゃり出てはならないのだ。危険を回避するとき以外、口出しや手出しをせずに全てを任せることで、高校生・大学生の動きはより主体的になる。

また、組織の運営等に関する代表や副代表などの意見は極力尊重したい。細かいことには口を挟まず任せることだ。信頼されているという気持ちが主体性に繋がり、考えや行動に好影響を与えることは間違いない。

老婆心ながら、任せるとは放任ではない。「任せる」の類義語は「見守る」である。

## オ 褒める

第5のツールは「褒める」である。褒めて伸ばすのが良いとされているのは理解していても、実際には叱って（時には怒って）しまうことが多い。親や教師は、子供のためを思って叱るというが、効果が薄いことを認識すべきである。誰だって叱られたら気分が悪い。前に進もうという気持ちになるだろうか。叱咤に対して反骨精神で伸びる例は希少なのだ。

「褒める」を育成ツールの一つとして積極的に使っていきたい。注意深く観察し、良いところを見つけて褒める。日ごろから心がけたいものである。皆の前で褒めるのもいいが、その後、1人だけの時に「うん、なかなか良かったな…」とボソリとつぶやくのも効果的だ。

## カ 与える

第6のツールは「与える」である。7つの中で唯一の能動的なアプローチだが、場面とタイミングが大事なので不用意に用いてはならない。特に初期段階であれこれ指示するような与え方は禁物だ。取組がある程度進行し、更にワンステップ上に行けそうなときに用いるのが効果的だ。例えば、前述の絵本づくり企画では、イベント終了後の振り返り時に、「後輩のために今回のノウハウをレポートにしてみようか」という具合だ。力量を見極め、タイミングをはかって与えることが肝要である。

命題を与えることもある。以前はチーフが適当に決めていた寺子屋のアトラクションに「季節感やふるさと感じるもの」「社会性のあるもの」という命題を与えてみた。各月のチーフは色々と趣向を凝らすようになり、今年度はどのアトラクションも明確なテーマを持つものになった。必然的に綿密なりハーサルを行うようになり、内容の充実とともに、チーフをはじめメンバーのスキルアップにつながった。

## キ 待つ

最後のツールは「待つ」である。子供たちは大人の思うとおりに動かない。イライラするほどゆっくりだったり、ムカつくくらい回り道をしたりする。「さっさと歩いて」「早

く食べて」「ボヤボヤしないで」など、親はつい口に出してしまう。先生も同様である。しかし、一見無駄に見える行動の中にこそ、成長のための重要な学習の要素が含まれていることを忘れてはならない。多くの場合、待てないのは大人の都合だ。子供の成長よりも大事な大人の都合とは何だろうか。

待つ…これができなければ、前述の6つの仕掛けは全て水の泡と消える。待つは簡単そうに見えて、実際にはなかなか忍耐の必要なツールである。しかし、ここが我慢のしどころ。待つは最強の育成ツールと心に刻んでおきたい。

### (3) 進化する育成プログラム

これらの「7つの育成ツール」は一見何の変哲もないありふれたものだ。しかし、これこそが大きな力を発揮する強力な育成ツールなのである。世界で4000万部を突破した「7つの習慣」も特殊なものではない。大事なのは、普通のことをしっかりとやるということである。本当に使いこなすには熟練が必要かもしれないが、トライする価値はあると思う。コツは…彼らの成長を第一に考えればいい。

そういう日々を過ごしていくうちに育成プログラムは進化し、次第に強力になっていく。高校生・大学生が自分たちの成長に有効な取組を自ら付加していくからである。それもまた主体性の成せる業である。

## むすびに

改訂された学習指導要領の前文に教育基本法の第1条（目的）と第2条（目標）の全文が記載されている。なぜ、わざわざ紙面を割いて全文を載せたのか。その意図を考えずにはいられない。

私たちは、人格の完成を目指し…という目的に本気で対峙しているだろうか。中でも、教育の中心たる学校教育においては、第2条の目標のどのくらいをカバーできているのだろうか。この前文はそのことを指摘しているように思えてならない。

教育の目的は何かという原点に立ち戻ったとき、教育の本来の在り方が必然的に見えてくる。学校教育に依存しすぎることなく、地域の様々な教育資源を活用するとともに、家庭や地域社会との連携による教育の場が必要である。

教育の目標 (教育基本法第2条)	
1 幅広い知識と教養 真理を求める態度 豊かな情操と道徳心 健やかな身体	4 生命を尊び 自然を大切に 環境の保全に寄与
2 個人の価値を尊重 能力、創造性、自主及び自律の精神 勤労を重んずる態度	5 伝統と文化を尊重 我が国と郷土を愛する 他国を尊重 国際社会の平和と発展に寄与
3 正義と責任 男女の平等 自他の敬愛と協力 公共の精神 主体的に社会の形成に参画・発展に寄与	

12年間にわたるレスタの取組を通してたどり着いたこと、それは「学びの主役は学習者だ」という極々基本的なことであった。環境を整備し、主体性を引き出すことができれば、学習者の成長は無限の可能性を持っている。一方、どんなに優れた内容であっても、どんなに教え方が上手であっても、学習者がその気にならなければ教育者は無力である。教え込みや一方的な講義という独りよがりの教育から脱却し、教育は学習のサポートだという本来の姿を思い出すべきである。教育の立ち位置は「働きかけること」であり「試みること」であるのだから。

#### 教育とは

ある人間を望ましい姿に変化させるために、心身両面にわたって、意図的、計画的に働きかけること。知識の啓発、技能の教授、人間性の涵養などを図り、その人のもつ能力を伸ばそうと試みること。(ある国語辞典より)

「環境を整え、主体性を引き出す」という教育の原点に立とうとの私の提案は、現在の教育を全否定するものではない。しかし、本当に子供たちのことを思うなら、現状の欠点や弱点を真摯に受け止め、改善していく努力をすべきであろう。レスタという名の社会参加活動をベースとする青少年育成プログラムはローカルで小さな試みである。学校現場では不可能だと切り捨てることは簡単だが、ぜひ、取組の本質に目を向けていただきたい。真の教育の在り方へのヒントがきっとあるはずである。

本取組が、次代を担う子供たちのために、学校教育や社会教育の発展に寄与することを願うものである。

#### <参考文献、参考資料>

- ・小林 茂 (1971年) 『組織蘇生学』
- ・ステーブン・R・コヴィー (2008年) 『7つの習慣』
- ・星野欣生 (2003年) 『人間関係トレーニング』
- ・小林 茂 (2015年) 『第3の組織論』
- ・文部科学省 (2019年) 『高等学校学習指導要領 (平成30年告示)』
- ・文部科学省 (2023年) 『児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸問題に関する調査』